- 1) H. E. Stanley, Phys. Rev. Letters 20 (1968) 589.
- 2) R. Abe and S. Hikami, Prog. Theor. Phys. 57 (1977) 1197.
- 3) R. Abe, Prog. Theor. Phys. 49 (1973) 113.

ランダムボンドイジングモデルにおけるガラス状相

## 東北大・エ 桂 重 俊

ランダムボンドイジングモデルを Bethe 近似で考える。ハミルトニアンが

$$-H/kT = \sum_{j=1}^{Z} K_{j} \sigma_{0} \sigma_{j} + C \sigma_{0} + \sum_{j=1}^{Z} L_{j} \sigma_{j}$$
(1)

で与えられるクラスターを考える。( $L_j$ はスピンjに働らく有効場であとで self-consi-stent に定める。)中心スピン $\sigma_0$ , まわりのスピン $\sigma_i$ および相関 $\sigma_0\sigma_i$ の熱平均値は

$$\langle \sigma_0 \rangle = th \left[C + \sum_{j=1}^{\mathbf{Z}} th^{-1} \left(t_j l_j\right)\right]$$
 (2)

$$\langle \sigma_i \rangle = th [L_i + th^{-1} \{t_i th [C + \sum_{j=1}^{Z'} th^{-1} (t_j l_j)]\}$$
 (3)

$$<\sigma_0 \sigma_i >= th [K_i + th^{-1} \{l_i th [C + \sum_{j=1}^{Z'} th^{-1} (t_j l_j)]\}$$
 (4)

で与えられる。ただし

$$t_j = thK_j$$
,  $l_j = thL_j$   
である。ここで

 $L'_{i} = C + \sum_{j \neq i}^{Z} t h^{-1} (t_{j} l_{j})$ (5)

とおくと

$$<\sigma_{0}>=\frac{t_{i}l_{i}+l_{i}'}{1+t_{i}l_{i}l_{i}'} < \sigma_{1}>=\frac{l_{i}+t_{i}l_{i}'}{1+t_{i}l_{i}l_{i}'}$$
(6)

ランダムボンドイジングモデルにおけるガラス状相

$$<\sigma_{0}\sigma_{i}> = \frac{t_{i}+l_{i}l_{i}'}{1+t_{i}l_{i}l_{i}'}$$
(7)

となる。  $L'_i$  は j = i 以外のクラスターの端の点のスピンが中心に及ぼす有効場の和で ある。与えられた J の分布を P(J). 求めるべき l の分布を g(l)とする。配位平均を で表わし、 $\overline{\langle \sigma_0 \rangle} = \overline{\langle \sigma_i \rangle}$ , より一般に  $\overline{f(l_i)} = \overline{f(l'_i)}$ を課すと

$$\int f(1_{i})g(1_{i})d1_{i} = \int f(1_{i}') \prod_{\substack{j=1\\ j\neq z}}^{z'} [P(J_{j})g(1_{j})dJ_{j}d1_{j}]$$
(8)

これはg(l)が積分方程式

$$g(1'') = \int \delta(1'' - th \left[C + \sum_{j \neq i}^{z} th^{-1}(t_j l_j)\right] ) \\ \times \prod_{j \neq i}' \left[P(J_j)g(l_j)dJ_jdl_j\right]$$
(9)

をみたすことを示す。Jの分布が濃度pのJ<sub>A</sub> と濃度1-pのJ<sub>B</sub> との binary mixture のときは

$$P(J) dJ = [p\delta(t - t_A) + (1 - p) \delta(t - t_B)] dt$$
(10)

より

$$g(1'') = \sum_{\alpha_{1}\alpha_{2}\cdots\alpha_{z-1}} p_{\alpha_{1}} p_{\alpha_{2}} \cdots p_{\alpha_{z-1}}$$

$$\times \int \delta(1'' - \text{th} [C + \Sigma' \text{th}^{-1}(t_{\alpha_{j}} l_{\alpha_{j}})]) \prod_{\substack{j=1\\ j\neq i}}^{z} [g(l_{j}) dl_{j}] \qquad (11)$$

を得る。それにより積分方程式(11)は F. Matsubara<sup>1)</sup>によって得られ Matsubara Sakata<sup>2)</sup> によって Edwards Anderson<sup>3)</sup>と独立にスピングラスの存在が示されたものである。 クラスター関数 f の平均はペア関数の平均として表わすことが出来る。

$$\overline{f(\{1_{j}\})} = \int f(\{1_{j}\}) \prod_{j=1}^{z} [P(J_{j})g(1_{j})dJ_{j}d1_{j}]$$
  
=  $\int f(1_{i}, 1_{i}')P(J_{i})g(1_{i})g(1_{i}')d1_{i}d1_{i}'$  (12)

$$z = 3, C = 0, J_{A} = -J_{B}, p > 1/2の場合を考える。 g(1)をg(1) = \lambda\delta(1-l_{0}) + \mu\delta(1) + \nu\delta(1+l_{0})$$
(13)

で近似し, (8)の f (l)として  $l^{2n-1}$ ,  $l^{2n}$  を選ぶと

$$\overline{l^{2n-1}} = (\lambda - \nu) l_0^{2n-1}$$

$$= (2p-1)(\lambda - \nu) \{(\lambda + \nu) [\frac{(2tl_0)^{2n-1}}{(1+t^2l_0^2)^{2n-1}} - 2(tl_0)^{2n-1}] + 2(tl_0)^{2n-1}\}$$

$$= (\lambda + \nu) l_0^{2n}$$
(14)

$$= (\lambda + \nu)^{2} \left\{ \frac{1}{2} \frac{(2tl_{0})^{2n}}{(1 + t^{2}l_{0}^{2})^{2n}} - 2(tl_{0})^{2n} \right\}$$
  
+ 2(\lambda + \nu)(tl\_{0})^{2n} + (2p-1)^{2}(\lambda - \nu)^{2} \frac{1}{2} \frac{(2tl\_{0})^{2n}}{(1 + t^{2}l\_{0}^{2})^{2n}} (15)

ここに  $t = t_A = -t_B$ . すべてのn について(14), (15)をみたすよう  $\lambda$ ,  $\mu$ ,  $\nu$ ,  $l_0$  が定ま れば g(1)の正解であるがいまは n = 1, 2に対して(14)15)を考えよう。

(14)(15)は

$$\lambda = \nu = 0 \tag{16}$$

の解をもつ。これより $g(l) = \delta(l)$ となり、常磁性相(以下Pと略記)を与える。

(14)(15)の $\lambda = \nu \neq 0$ の解がガラス状相(スピングラス,以下GLPと略記)を与える。  $\lambda \neq \nu$ の解が強磁性相(以下Fと略記)の解である。

 $n = 1 \ge n = 2$ に対する(14)より  $\lambda + \nu$ を消去すると強磁性相の  $l_0$  が3次方程式(略)の解として求まる。これを  $l_0 = l_F(t, p)$  と記すとこれを用いて  $\lambda$ ,  $\nu$ は

$$\begin{aligned} \lambda_{\nu} &= \frac{1+x}{4x} \left\{ \left( 2 - \frac{1}{t(2p-1)} \right) \pm \frac{1}{2p-1} \left[ x(2+x) \right] \right\} \\ &\times \left( 2 - \frac{1}{t(2p-1)} \right)^2 - (1+x)(2t^2-1) \left( 2 - \frac{1}{t(2p-1)} \right) \right\}^{1/2} \end{aligned}$$
(17)

と求まる。ここに  $x \equiv l_F^2 t^2$ である。

 $\lambda = \mu \neq 0$ の場合は n = 1 と n = 2 に対する(15)よりガラス状相の  $l_0 = l_G(t)$ が4次方程式(略)の解として求まる。そして未定係数  $\lambda$ ,  $\nu$ は

$$\lambda = \nu = \frac{1}{4} \frac{(1+x)(2t^2-1)}{t^2x(2+x)}$$
(18)

となる。 (x =  $l_G^2 t^2$ )(15)と(17), (15)と(18)が一致するところとしてP-F, P-GLPの相

Cu<sub>3</sub>Au 合金における秩序-無秩序相転移の過渡過程における秩序整列過程の研究 境界が求まり、これは先に得られている結果と一致する<sup>2)4)</sup>(17)の[]内が消えると ころで F-GL Pの相境界が得られ、

$$P = \frac{1}{2} \frac{x(2+x) + t [1+5x-2x^2-2t^2(1+x)]}{t [1+5x+2x^2-2t^2(1+x)]}$$
(19)

で与えられる。T=0でF-GLPの境界はP = 7/8となる(ref.4)の Appendix の結果と一致)。

(7)(10)(12)と(18)(x =  $l_G^2 t^2$ )を用いればGLPのエネルギーが,(7)(10)(12)と(17)(x =  $l_F^2 t^2$ )を用いれば Ferro のエネルギーが得られそれから比熱,エントロピーが求まる。

積分方程式(9)から一般の分布 P(J)に対する F, G L P, Pの相境界も得られる。この 分布を中心 J, 幅 2  $\Delta$ の長方形分布にとった場合の相境界は ref. 6)に与えられて居る。 J = J<sub>0</sub>z,  $\Delta = \Delta_0 \sqrt{z}$  とと z →∞の極限で Be the 近似は分子場近似に tend して P - F, P-GL Pの相境界は Scherrington Kirkpatrick<sup>7)</sup>のそれと一致する。

## 参考文献

- 1) F. Matsubara, Prog. Theor. Phys. **51** 1694 (1974)
- 2) F. Matsubara and M. Sakata, Prog. Theor. Phys. 55 672 (1974)
- 3) S. F. Edwards and P. W. Anderson, J. Phys. F. 5 965 (1975)
- 4) S. Katsura, Prog. Theor. Phys. 58 No. 2 (1977)
- 5) S. Katsura and S. Fujiki, 投稿準備中
- 6) D. Sherrington and S. Kirkpatrick, Phys. Rev. Lett. 35 1792 (1975)

Cu<sub>3</sub>Au 合金における秩序 – 無秩序相転移

の過渡過程における秩序整列過程の研究

## 東エ大・理 橋 本 巍 洲

二元合金系の秩序-無秩序相転移の問題は、 Ising スピン系における相転移の問題の